

2018年

9月10日
第318号

ゆうあい通信

発行所 石井記念友愛園

宮崎県児湯郡木城町椎木 644 番地 1

〒884-0102 TEL 0983-32-2025

子供の未来を作る

園長 児嶋 草次郎

長い夏がようやく終り、ツクツクポーシの鳴く園庭の上を、秋風がゆったりと流れていきます。いつの間にか桜の木もほとんど落葉を終え、花壇の花々は、しっかりと枝葉を張りめぐらし、秋の花の季節に備えています。

今年の夏はさんざんでした。まず手刈りの稲刈りがモチの部分一反弱しかできませんでした。次々に台風が来て雨が多く、水田は常に水がたまっていて沼状態。稲の切株の上を歩かないと長靴も抜けなくなってしまいます。刈った稲は後にひかえの者にそのまま渡し、脱穀機のところへ持って行きました。このモチの所はぬかってコンバインも入らないあり様でしたので、少雨の降る中、手刈り決行でした。他はすべてコンバインにお世話になるしかありませんでした。稲刈は子供たちに精神力・忍耐力・誇りを生み出す労作の中心であり、中・高生の全員が参加できなかったのは残念でした。

次に、ソフトボール大会が酷暑で熱中症になるおそれがあり、危険ということで中止。県の大会で優勝し、長崎での九州大会制覇を期していた野球も、台風のため中止。天が味方をしてくれなかったこの夏ですが、それなりの理由が私たちにあったとするならば、反省しなければなりません。

さて、今回は8月26日（日）の石井十次セミナーについて書かせていただきます。今年、基調講演は公益財団法人大原記念倉敷中央医療機構副理事長、相田俊夫様に、「大原孫三郎、石井十次の理念を現代の医療経営生かす」という題でさせていただきます。今までこの石井十次セミナーでは、公益財団法人大原美術館理事長（当時）の大原謙一郎様に来ていただきお話をお聞きしましたし、社会福祉法人石井記念愛染園理事長の和久井康明様にも講演をいただいています。次に熱望していたことが、ようやく実現しました。

石井十次にとって最大の親友であり支援者は大原孫三郎氏でしょう。大原氏の遺した公益事業がその後どのような理念を掲げてどう発展しているのかを知ることは、我々石井記念の事業を行っているつもりの方にとっては、大きな指針となり得

ます。なにしろ、石井記念のこの事業は大正 15 年から一度中断しているのであり、昭和 20 年から再開したとは言え、継承続ける大原記念の事業に比べると言わば新参者。先輩の後姿から学び、道を踏みあやまらないようにしたいという思いがあります。

セミナーでの挨拶では、私は理事長として次のように述べました。

「我々組織がこれから 50 年、100 年と存続していく上において、一番大切なものは何なのか。それは、その組織の理念であると考えます。創立者の理念をいかに共有し、また次世代に伝承していくのか。理念を見失うと迷走し始め、組織は崩壊すると考えます。」

「今日は、大原孫三郎氏が東洋一をめざして作られた倉敷中央病院の事実上のトップであられる副理事長の相田俊夫先生をお招きして、その理念と事業概要についてお話しいただき学びます。現在 3000 人以上の職員が働き、その中に医師だけでも 484 人もおられるそうです。

私たちは何度か見学に訪れたことがあります。病院の中に街がある、そんな雰囲気でした。この巨大化した病院の 3000 人の職員たちを一つにまとめている理念は、大原孫三郎氏の精神だと思っておりますが、本日はそれらを、また石井十次との関係を学び直すことで、私たちのエネルギーとしたいと思っております。」

倉敷中央病院は、大正 12 年（1923 年）「倉紡中央病院」としてスタート。つまり、大原孫三郎氏の経営する紡績会社の職員たちの病院として始まったのです。しかし 4 年後には「倉敷中央病院」と改称。その頃の理念には「真に患者のための治療 病院くさくない明るい病院 東洋一の理想的病院」の 3 点が掲げられます。

石井十次の影響はもちろんあったのですが、大原氏は「独自の人道主義（後に人格主義と改める）を育み、社会から得た富は社会に還元するという考えのもとに」作った病院であり、紡績会社の従業員だけではなく、広く地域住民にも開放したと相田様は説明されました。

83 床から始まった病院は今や 1166 床となり、日本トップレベルの総合病院へと発展しています。孫三郎氏は、病院の 10 周年記念式の時には「現状に満足することは退歩の第一歩である。」とも鼓舞されたそうです。

「真に患者のための治療」とは、石井十次に言わせれば、「児童中心主義」ということになるのでしょうか。現代の言葉に直せば「利用者中心主義」です。「病院くさくない明るい病院」とは、どのような内容なのか。当時紡績工場では、「女工哀史」ではないけれど、一般的には女工たちは、不衛生な飯場のような長居式の寄宿舎で生活していました。その生活環境に心を痛めた孫三郎氏は、大部屋を家庭的な分散式の寄宿舎に大改造したのです。その任にあたったのが柿原政一郎氏で、柿原

氏は、岡山孤児院の少人数の家庭的塾舎を模範としたのでした。

子ども達に最善の生活環境を与えようとする石井十次の感性と同じ感性を大原氏も持っておられ、病院でも当時の常識レベルを越えようとされたのでしょう。「病院くさくない明るい病院」、現代ではそう違和感なく聞こえて来ますが、当時としては画期的なことだったのでしょう。画家児島虎次郎に命じて、病院内に石造りの噴水まで作っています。西洋の絵（レプリカ）を飾ったり、温室を作ったり、当時の新聞では病院の芸術化と評されたとか。

そして「東洋一の理想的病院」。「日本一」でないところがすごい。創設当時は83床ですから、「東洋一」と宣言するには、孫三郎氏と言えども勇気がいったことでしょう。あえて「東洋一」と高い目標を設定することで職員たちの士気を上げようとしたのかもしれませんが。石井十次がこの茶臼原に理想郷を作ると宣言したのと重なるような気がします。人間は実現不可能なくらいの高い目標や志を掲げること、目先のトラブルや悩みごとに振り回されないようになるのです。

その後時代とともに発展していくわけですが、二代目大原総一郎氏も、創立の理念を再現させながらも具体的ビジョンについては、ギアチェンジしていったと相田様は続けられました。

そして、その当初の理念の上に現在の基本理念は、1、患者本位の医療 2、全人医療 3、高度先進医療の三つをあげられました。言葉は少々抽象的になっているけれど、95年間、基本の理念はブレてないのだと感じます。

相田様がお話されたことで、私の頭に刻みこんでおかねばならない言葉を何点かここに書き記しておきます。

- ・財務基盤確保の重要性。「道徳なき経済は犯罪であり、経済なき道徳は寝言である。」という二宮尊徳の言葉を引用されました。「利益は使命達成のための原資」とも。
- ・『「世界水準の医療を地域住民に提供する」を当院のミッション・基本方針に掲げ、実践・努力している。』
- ・「広域急性期基幹病院は、公的病院が大半であるが、民としての自由度の中でパイオニア的精神を発揮し、トップランナーをめざしている。」
- ・「利を強く求めなければ、持続できない厳しい時代の中、リーダーはより強い倫理観が求められる。」

相田様は「グローバルスタンダードを維持ないしリードしていく努力をしている」とも述べられました。グローバルスタンダードを考えるための講演が次のティア・キンバークさんの「アメリカ里親制度の光と陰」でした。この石井十次セミナーでは、今までイギリス、ドイツ、中国、韓国等から講師をお招きして、世界の社

会的養護について学んで来ています。この友愛通信でも繰返し報告して来ました。

昨年8月に厚労省より出された「新しい社会的養育ビジョン」は、どこにも書いてはないけれど、あきらかにアメリカ、イギリスを模範としており、であるならばその数字だけを追うのではなく、その中味の良い所も悪い所も学んで、日本の社会的養護の未来を作っていくべきだと考え企画したのです。

先月7月に厚労省は第二弾として、「都道府県社会的養育推進計画策定要覧」を発表し、そのビジョンを具体化するための推進計画を、来年度中に各都道府県で作るようにと指示して来ています。

施設にとっては危機的状況ですが、日本型の新しい社会的養護・養育を築くチャンスが訪れているのだという発想でアメリカから学びたいと考えました。

講師のティア・キンバークさんは、マサチューセッツ州ボストンにあるアーバークカウンセリングサービスという民間の会社のディレクターです。主に貧困地域の25の公立学校を拠点にカウンセリングプログラムを組み、600名の子供たちに対して個人、または家族療法等に取り組んでおられるということでした。実践者としての経験は40年です。通訳は、ティアさんのお友達である京都薬科大学理事、森田和子さんをお願い致しました。

セミナーの前日（8月25日）に宮崎に入られ、私は保育園と老人デイサービスと小規模児童養護施設が共生し合っている、高鍋町にある石井記念にっしん保育園、じゅうじデイ、じゅうじの家を案内しました。デイではちょうど学童の小学生とお年寄りと一緒にゲームをしている最中で、またじゅうじの家では園児3人が在宅で、このグループホームでは職員3人が住み込んで子供たちと寝食を共にしていると説明しました。イギリス、ドイツから講師をお招きした時も案内していますが、ティアさんも、こんな所はアメリカにもないと言って感動しておられました。

8月26日、当日の午前中、我が友愛園の大学生3名とティアさんとの意見交換会を石井十次資料館隣の研修館で実施。日本では施設でも子供が立派に育っているということをアピールするため、さらに彼らに当事者として日本の福祉文化を守る気概を持ち責任を自覚してもらうために設定しました。始める前に、前日高鍋の複合化した小規模児童養護施設を見学しての感想を聞くと、ティアさんは次のように答えられました。

「ハードはもちろんソフトもすべてのことがアメリカには存在しない。アメリカでは、施設では、1、2年で出ていかねばならない。一番衝撃的なのは、一人の子供さんが長期にわたり同じ環境で育っていること。愛情をもって接して、長い付き合いの中で道徳心も育まれる。素晴らしい愛情ある光景を見たことで涙が止まらなかった。」

大学生3人とは、アキヒコ君（大4）、トモハル君（大1）、ユウイチ君（大3）です。別に打ち合わせをしたわけではないのですが、彼らは自分の生い立ちを紹介した上で、ティアさんに堂々と問いかけていました。

アキヒコ君の発言は重要です。

「自分は生まれてまもなく乳児院に入り2歳で友愛園に入所して、16年間施設で生活した。施設では愛着関係、永続的支援ができないと言われていたが、それは、間違いだと思う。友愛園では、職員は幼い頃から愛情を持って、起きてから寝るまで寄り添ってくれた。施設の機能とは、心の傷を持つ子を愛情を持って育てることと自立のために夢を持たせるなどの志教育だと思うが、ここでは、職員と一緒にやってそれをやって来れた。施設の方々には感謝でいっぱい、将来は恩返しのため施設で働きたい。」

トモハル君は、アメリカの施設や里親宅での生活で、人間不信等は癒されるのかと質問。それに対するティアさんの答えは「十分なケアはできていないと思う。施設・里親生活は短いし、傷ついた子供の心のケアはほとんどできていない。親も悪循環を繰り返している。」

三番目のユウイチ君は、「友人に里親宅で育った者がいるが、アメリカでは里親との関係がうまくいかなかったら、外の里親に移すのか。10年後、日本も里親宅をたらい回しにするのではないか。そうすると、子供がかわいそうだ。」と核心的な質問。ティアさんの答えはこうでした。

「ほんとにまさしくそのとおり。里親宅を転々とするのがアメリカの問題。次の里親さんを探す、そういう例をいっぱい見て来ている。子供の心には深く傷が残る。そういう子供に会って話をすることが私たちカウンセラーの仕事だが、今私はカウンセラーを子供に会わせるプログラミングをしている。どこの里親よりも長く関わっていくことで子供の心を開かせることを目的としています。」

アメリカでは施設生活は1、2年ということですから当然のことでしょうが、施設はあまり機能してないようで、子供たちも施設に対して良い思い出が残ってないケースも多く、ティアさんは、アメリカの施設で働くことはすすめられないとも言っておられました。施設スタッフの待遇も悪いとか。施設からの大学進学率は3%未満だそうです。

さて、いよいよティアさんの講演です。ティアさんが「じゅうじの家」を見て衝撃を受けたのと逆の意味で、私は衝撃を受けました。

「The Foster Care System in America is broken」と話始められたのです。昨年、ティアさんの住むボストンにおいて年間35人の里子が亡くなり、アメリカ国内では336人の里子が亡くなったとも話されました。私たち日本人がイメー

ジしているアメリカの里親とは、かなり違った実態があるようです。あまりにも多くの人々がお金のために里親になる。良い里親より悪い里親の方が多い。短大程度の学力もなく、平均より収入の少ない人が多く、42%がアフリカ系アメリカ人だとか。

そして、びっくりするのは、里親宅にとどまっている期間は平均2年間だということです。5年以上養育しているのは6%のみだそうですから、ティアさんが10年以上生活している友愛園の子供たちを見て感動されたのが納得できます。アメリカにおいては、厚労省の言う里親宅にやれば永続的支援が行われるなど言える状況ではとてもないようです。

ここでちょっと整理しておきます。日本の人口が1億2600万に対して、アメリカの人口は3億2800万。社会的養護を受けている児童は日本が3万8000人に対して、アメリカは48万9000人。ケタが違います。移民が多かったり、麻薬の蔓延等で多くの家庭が崩壊しているのでしょう。

そして、日本の里子が6500人程度であるのに、アメリカは43万人（ティアさんはフォスタケアシステム50万人と紹介されましたが、おそらく、社会的養護児童のことだと思います）。里親委託率については、ティアさんは、里親委託率48%、親族と一緒に生活するケースが24%（親族里親と思われます）、と紹介されました。残り18%がグループホームか施設での生活です。意外に親族に引き取られるケースが多く、これは今後日本の里親推進にヒントになるのかもしれませんが。養子縁組についても34%が親族に引き取られているとティアさんは話されました。

そして最後にティアさんにはこう言われました。

「Do not recreate the American Foster System in Japan」

通訳の森田さんはDo not recreate を「マネてはならない」と訳されました。Recreate を辞書を引くと「再現する」と書いてあります。私は、アメリカの失敗を日本で再現してはならないと理解することにします。カウンセラーとして、多くの漂流する子供たちを見て来たティアさんのお話は、非常に説得力のあるものでした。

厚労省が出した「都道府県社会的養育推進計画要領」はすでに施設現場まで下りて来ており、県からの指導も始まっています。特に里親推進の拠点となるフォスターリング機関の立ち上げについては、多くの知恵とエネルギーを注いでいかねばならないでしょう。子供たちの未来を作るため、積極的に参戦しながらも、日本の社会的養護の福祉文化についても大いにアピールしていきたいと思います